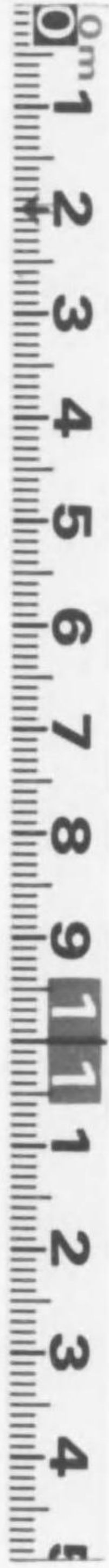


277
全 譯

芥子園畫傳

第十一冊
草蟲花卉譜 下冊

30
40



始





小杉放庵 註解
公田連太郎 譯文

芥子園畫傳



第十一冊

草蟲花卉譜(下冊)

東京アトリエ社刊行

芥子園畫傳第十一册草蟲花卉譜下冊目錄

芍	藥	做易元吉畫	四
夜	合	做陳昌祐畫	六
鶯	粟	杜少陵詩	八
僧鞋	菊	一名鶯鶯畫	一〇
金絲荷葉	王安節詩	三	
秋	葵	做邊鸞畫	一四
菱	花	做劉永年畫	一六
鳳	仙	做林良畫	一八
畫	萱	做徐崇矩畫	二〇
雞	冠	做徐崇矩畫	二三
蒲公	英	做黃居寀畫	二四
錦	雁	做趙裔畫	二六
來	紅	陳石亭詩	二六

蘋	花	做袁義畫	二六
紅	蓼	做黃筌畫	二八
臘	菊	做盛安畫	三〇
淡竹葉花	沈因伯題	三二	
西番	蓮	做陳仲仁畫	三五
蓮	花	做黃筌畫	三六
風	蘭	做吳秋林畫	四〇
蜀	葵	做梅行思畫	四二
紫雲	英	一名荷花紫草做吳梅溪畫	四四
虞美	人	做趙雪巖畫	四六
水	仙	做王淵畫	四八
靈	芝	做王淵畫	五〇

雪裏紅 做林伯英畫 成公綏繪 賦句郭聚五題 八二

鳳頭萱	做黃居寀畫	三
燕麥	做景卿畫 王孫數題	三
魚兒牡丹	一名荷包牡丹 做盛懋畫 周必大句	三
春蘭	做裴叔泳畫 楊炯賦句	三
紫蝴蝶	做張奇畫 黃虞山人句	三
藤菊	做黃居寀畫 陳沂句	三
錦葵	做何尊師畫 曹建東句	三
美人蕉	做黃居寀畫 路德延句	三
春羅夜合	做刁光胤畫 王安節題	三
秋海棠	做趙孟頫畫 陳石亭句	三
水仙茶梅	做黃居寀畫 王又唐題	三
玉簪	做胡擢畫 陳石亭句	三
剪秋羅	做徐榮之畫 黃虞句	三
紅黃秋菊	做滕昌祐畫 白居易詩	三
芙蓉	做周昉畫 楊誠齋句	三



芍藥(易元吉の畫に倣ふ。
邵康節の詩)

要與牡丹爲近侍。鉛華不
御學梅粧。

牡丹の奥に近侍と爲らんと要
し、鉛華、御せず梅粧を學ぶ。
解 芍藥の花の牡丹に似た
れども、而も淡麗なること
を言ふ。鉛華御せずとは、
べにおしろいを用ひざるを
いふ。この語は、曹植の賦
に、芳澤加ふる無く、鉛華
御せず、とあり、又、唐の
玄宗皇帝が寵妃梅妃の畫像
に題したる詩に、鉛華御せ
ず天眞を得たり、とあるに
本づく。梅粧とは梅花の如
く、又梅妃の如き清楚潔白
なる粧の意。宋の邵康節は、
字は堯夫、易理に精しく、
皇極經世書・擊壤集等の著
あり、卒して康節先生と號
す。その白芍藥の詩に、阿
嬌天上舞霓裳、姊妹庭前
剪雪霜、會與牡丹爲近
侍、鉛華不御學梅粧とあ
り。



要與牡丹爲近侍
鉛華不御學梅粧



夜合（蘇昌詒の畫に倣ふ。梁の宣帝の詩）

含露忽低垂。從風時偃仰。

解 夜合は百合の一種なり。これは夜合の花が、露を帯びて低く垂れ、風に吹かれて或は俯し或は仰ぐことを詠じたるなり。梁の宣帝の百合を詠する詩に、接葉有多重、開花無異色、含露或低垂、從風時偃仰、とあり。前の芍薬及びこの夜合の題詠に、原詩と異同あるは、此書の編者が勝手に改めたるなり。古人の語句を引用するに勝手に改竄するは、古來支那人の惡き癖なり。



含露忽
低垂從
風時偃
仰



鶯粟(一名麗春、錢舜舉
の畫に倣ふ。杜少陵
の詩)
百艸競春華 麗春應最勝。
百艸、春華を競ふ、麗春應
に最も勝るべし。
鶯粟は、鶯粟と同じ、
けし。麗春は其一種、虞美
人草、ひなげし。いろく
な草花が春のはなやかさを
競うて居るなかで、最も勝
つて居るのは、麗春であら
う。

百艸競春華
麗春應最勝



僧鞋菊一名鴛鴦菊、一名鴛鴦菊、王盤の畫に倣ふ。王念草の詞。調は香蘭變を用ふ。

黃華開後霜風順。籬邊又見僧鞋菊。度履向柴桑。詭將慧遠量。同爲白社客。染得青蓮色。一隻謾西歸。雙鳧還對飛。

黃華開いて後霜風順たり、籬邊又見る僧鞋菊。度履柴桑に向ふと、詭將慧遠の量かと。同じく白社の客と爲り、染め得たり青蓮の色。一隻、西に歸る、雙鳧還た對して飛ぶ。

僧鞋菊は、とりかぶとの一種、其花が坊さんの鞋に似て居るといふので、此名をつけたるなり。因つて坊さんの鞋の故事を用ひて此詞を作りたるなり。黃華は菊の花。柴桑は縣の名、陶淵明、こゝに居る。慧遠は晉の僧、白蓮社を結び、淨土に歸依するを以て宗と爲す。陶淵明と親し、量は稱と通ず、履二個をいふ。白社は白蓮社。青蓮色は紫に青を帯びたる色。一隻西に歸るとは、達磨大師の故事を用ふ。雙鳧は履をいふ。王喬、神術有り、常に朔望に縣より朝に詣れども、車騎を見ず。太史、之を伺ひ、其の至らんとするときは雙鳧有りて東南より飛び來ると言ふ。是に於て履を擧げて之を張りたるに、但だ一隻の鳧を得たり。則ち四年中に居ひし所の履なり。明の王盤は、字は鴻漸、西樓と號す。高郵の人。情を山水に縱にし、名、海内に重し。善く菊を畫き、拙才有り。好んで書を讀み、又、蘭草を善くす。詞は韻文の一種。香蘭變は白の名。

す。陶淵明と親し、量は稱と通ず、履二個をいふ。白社は白蓮社。青蓮色は紫に青を帯びたる色。一隻西に歸るとは、達磨大師の故事を用ふ。雙鳧は履をいふ。王喬、神術有り、常に朔望に縣より朝に詣れども、車騎を見ず。太史、之を伺ひ、其の至らんとするときは雙鳧有りて東南より飛び來ると言ふ。是に於て履を擧げて之を張りたるに、但だ一隻の鳧を得たり。則ち四年中に居ひし所の履なり。明の王盤は、字は鴻漸、西樓と號す。高郵の人。情を山水に縱にし、名、海内に重し。善く菊を畫き、拙才有り。好んで書を讀み、又、蘭草を善くす。詞は韻文の一種。香蘭變は白の名。

黃花開後霜風順籬邊
又見僧鞋菊度履向柴
桑詭將慧遠量同為
白社客染得青蓮色一
隻謾西歸雙鳧還對飛



金絲荷葉 (呂紀の畫に倣ふ。王安節の詩)

葉圓排虎耳。花弱折蜂腰。
葉圓くして虎耳を排し、花弱くして蜂腰を折る。
解 金絲荷葉は、虎耳草。葉は圓形にして虎の耳を排列したるが如く、花は纖弱にして蜂の腰の折れたるが如しとの意。

葉圓排虎耳
花弱折蜂腰



秋葵(連翹の畫に倣ふ。

陳可封の詩)

秋風似學金丹術。戲把硫
黃製酒杯。

秋風、金丹の術を學ぶに似た
り、戲れに硫黃を把つて酒杯
を製す。

解 秋葵は黃蜀葵である。

金丹とは、道士、金石を煉
りて藥を爲り、之を服する
ときは神仙と爲るべしと謂
ふ。是れを金丹といふ。金丹
の術とは即ち仙術をいふ。
黃蜀葵の花の黄色なるを、
硫黃を以て作りたる酒杯に
似たりとし、秋に此花ある
は、秋風が仙術を學ばんと
するに似たりといふなり。



秋風似學金丹術
戲把硫黃製酒杯



菱花(劉永年の畫に倣ふ)

陸軍の詩)

轉葉任香風。舒花影流日。

轉葉、香風に任せ、舒花、流日に影す。

解 菱花は、ひしの花。目錄に菱花とあれども、こゝに畫かれたるは實は苳菜なりといふ。原本には此題缺無し。一本によりて之を補ふ。葉は風に吹かれてゆらゆらと搖き、花は西に傾きたる日に照されて居るといふ意。陸軍は葉の人、果の子。本傳は樂書卷二十六陸軍傳に附載す。

轉葉任香風
舒花影流日



鳳仙(林良の畫に倣ふ。
楊誠齋の詩)

細看金鳳出花叢、費盡司
花染作工。雪白色邊分彩
色。更饒深淺四邊紅。
細に看る金鳳、花叢より出づ
るを、費し盡す司花の染作の
工。雪白色邊、彩色を分ち、
更に饒し深淺四邊の紅。
解 鳳仙花は一に金鳳花と
曰ふ。花の形宛も飛鳳の如
く、頭翅尾足俱に全し、故
に金鳳と名づくと云ふ。詩
に金鳳とあるは、文字通り
金の鳳凰の意に見るべし。
司花は花をつかさどる神な
り。染作工は花を染めて彩
色する骨折の意。深淺は色
の濃淡なり。此詩は鳳仙花
の色彩の美しきことを詠じ
たるなり。

細看金鳳出花叢費盡司花染作工雪白
色邊分彩色更饒深淺四邊紅



蜜薺(徐崇矩の畫に倣ふ。沈雄の詞句を摘む)

閒將益母一絲同韻。只爲此花名字是宜男。

閒しん將かやく益母も一みどり絲たけなは同韻な。只爲ただ此花このはな名字なま是なり宜男いなん。

解 蜜薺は、薺草、和名わすれぐさ。一名宜男草、懐妊の婦人、其花を佩ぶるときは男子を生む、故に此名あり。益母も草の名、和名めはじき。婦人の産前産後の病を治す。故に益母草といふ。然し此處には益母草の畫は無し。おもしろからぬ題字なり。沈雄は、清の吳江の人。字は偶僧。古今詞話、柳塘詩有り。

閒將益母
一絲同韻
只爲此名
是宜男



鶴冠(徐崇嗣の畫に倣ふ。鄭影の詩)

一枝濃艶對秋光。露滴風搖倚砌傍。曉景乍看何所似。謝家新製紫羅囊。

一枝の濃艶、秋光に對す、露滴り風搖ぎて砌傍に倚る。曉景乍ち看れば何の似る所ぞ謝家の新製の紫羅囊。
解 鶴冠は雞頭なり。一枝の濃艶なる花が秋の日に照らされ、砌の傍に露が滴り風にゆられて居る。早朝に此花を見ると、謝家の新に造られた紫の羅の囊に似て居る。



一枝濃艶對秋
光
露滴風搖倚
砌傍
曉景乍看
何所似謝家新
製紫羅囊

蒲公英(黃居家の畫に倣ふ。王司直の題)

黃花名地丁。翠萼映蝶青。野色幽堪玩。鳴蟲靜可聽。

解 蒲公英一名、黃花地丁、たんぼぼ。翠萼は綠色の萼。蝶青は藍色。葉の色をいふ。但しこゝに畫きたるは、蒲公英に非ず、秋牡丹を誤りたるなるべしと云ふ。しかし秋牡丹の花は紅紫色なり。

黃花名地
丁翠萼映
蝶青野色
幽堪玩鳴
蟲靜可聽



錦萇雁來紅 (趙喬の畫
に倣ふ。陳石亭の詩)

野卉輕黃葉。猶能抱赤心。
況嗟顏色異。爛熳到秋深。
草花如猩染。秋光正雁來。
翻塔勝紅藥。繞砌映蒼苔。
野卉輕黃の葉、猶ほ能く赤心
を抱く。況んや嗟す顏色異な
り、爛熳として秋深きに到る
を。

草色、猩染の如く、秋光正
雁來る。塔に翻りて紅藥に勝
り、砌を繞りて蒼苔に映ず。

解 錦萇雁來紅は、はげい
とう。右なるを錦萇とし、
左なるを雁來紅とす。此詩
は葉鶏頭の色の鮮麗なるこ
とを詠ぜしなり。猩染は色
の紅なるをいふ。紅藥は紅
き芍薬。趙喬は後梁の人、
朱暉の弟子、羅壺に工に、
兼れて佛道人物に長ず。傳
影精妙、花鳥を善くす。陳
新、字は宗善、のち魯南と

改む。石亭と號す。明の正
徳の進士。編修を授けられ、
後、江西の參謀と爲り、山
東の參政を歴、山西の行太
僕寺卿に遷され、ついで致
仕す。蘇頌録、青徳録、石
亭集等あり。

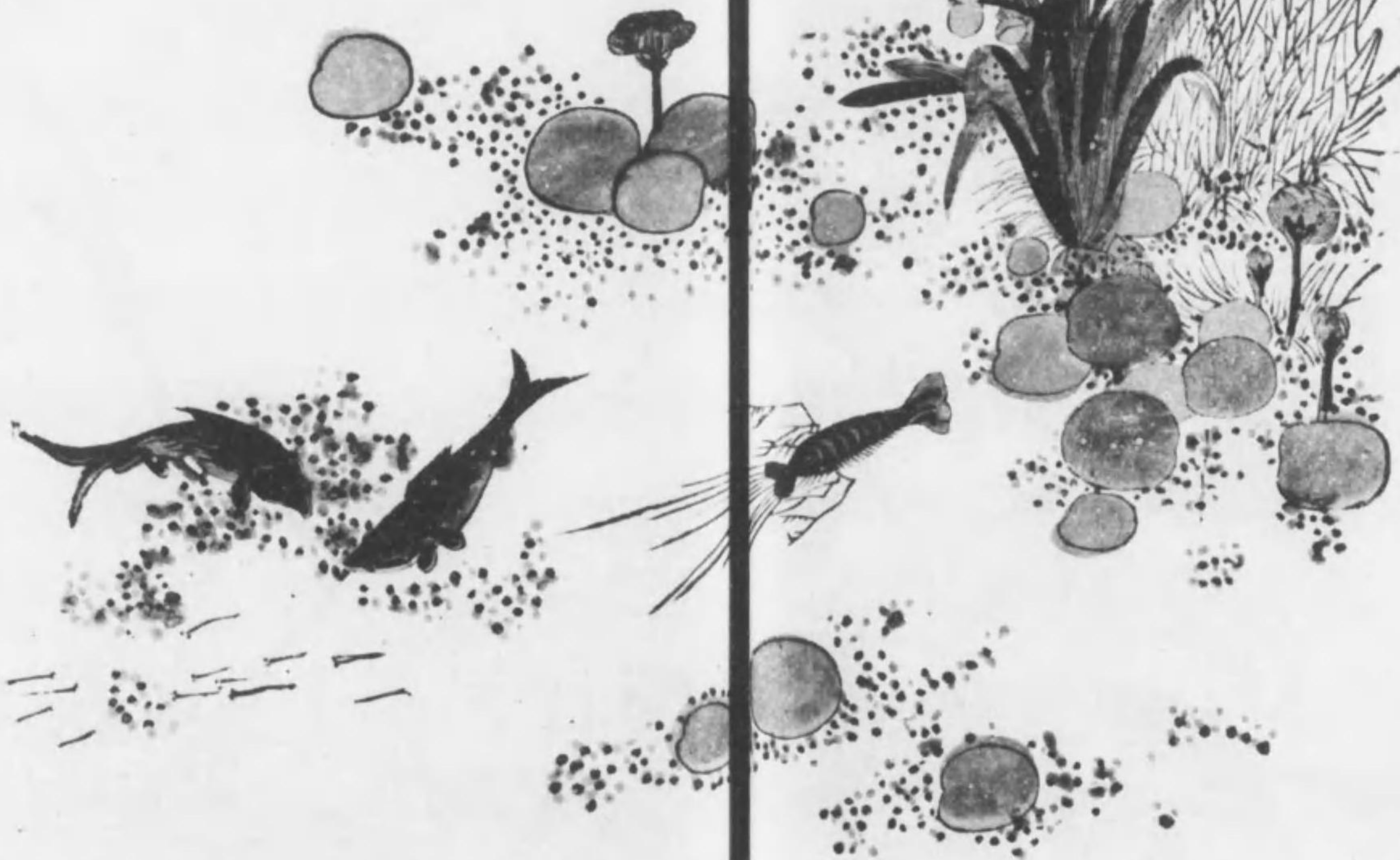
野卉輕黃葉猶能抱赤心
况嗟顏色異與秋深
草花如猩染秋光正雁來
翻塔勝紅藥繞砌映蒼苔
劉穗深



草色如猩染
秋光正雁來
翻塔勝紅藥
繞砌映蒼苔
四詩

蘋花（薺の葉に似ふ）
 王苾草の題）
 浮根同若藻、葉影覆魚蝦。
 浮根、若藻に同じく、葉影、
 魚蝦を覆ふ。
 解 蘋花は、うきくさ。浮
 根は水の中に浮びたる根。
 若は若菜、あさご。藻は、
 も。葉影は、あつまりたる
 影。魚蝦は魚とえび。

浮根同
 若藻
 聚魚
 覆魚蝦
 葉影



紅夢(黃筌の畫に倣ふ。宋景文の詩)

花穂迎秋結晚紅。

花穂、秋を迎へて晚紅を結ぶ。解、紅夢は、一名紅草、大毛夢。夢の穂の秋晩に紅なるさまを詠じたるなり。宋景文は、宋の雍邱の人、字は子京、唐書を撰す。工部尚書に累官す。卒して景文と諡す。

花穂迎秋結
晚紅



臘菊(盛安の畫に倣ふ)

王孫殿の題)

過露憐重色。因風拾落英。

露に^{よほ}沁うて重色を憐み、風に因つて落英を拾ふ。

解 臘菊は臘月即ち十二月の菊の意なるべし。重色は重くして垂れたる花をいふ。落英は落ちたる花。



過露憐重色因風
拾落英
王孫殿



淡竹葉花(一名翠蛾眉、
趙伯福の畫に倣ふ。此
因伯の題)

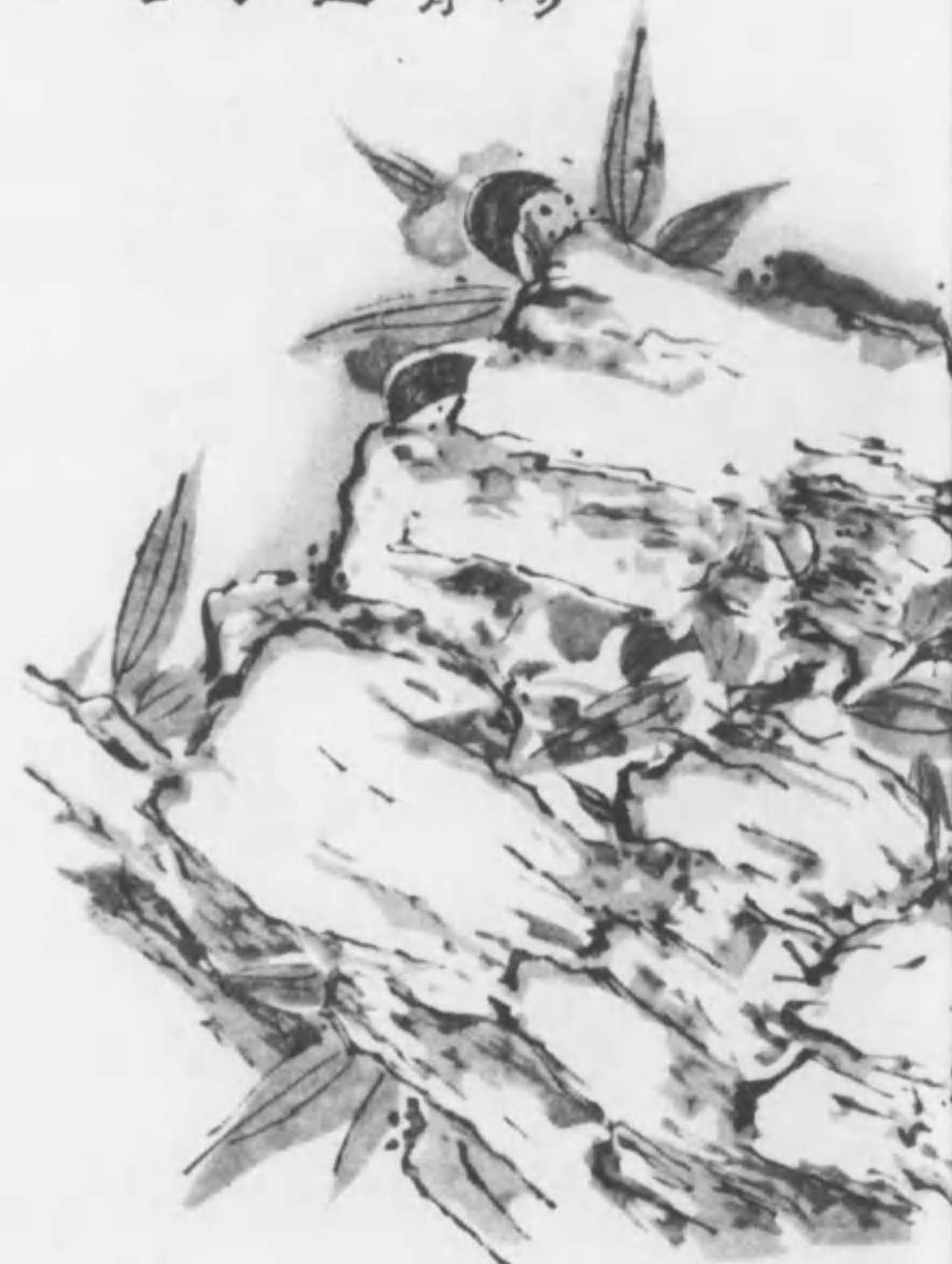
不將脂粉調粧新。遠學青
山染色勻。金鳳釵頭替未
稱。黛螺宜付畫眉。

脂粉を將て粧新を調はさず、
遠く青山を學んで染色勻し。
金鳳釵頭、替未だ稱はず、黛
螺宜しく畫眉に付すべし。(眉
の下に頭字を脱す、讀み難し。
恐らくは人の字を脱するなら
ん。)

解 淡竹葉花は、つゆくさ
の花。此詩はつゆくさの花
の色を青碧にして美しくし
を詠じたるなり。脂粉は、
べにとおしろい。染色勻と
は染めたる色にむらの無き
をいふ。金鳳釵は金のかん
ざし的一种。替は、かうが
い。黛螺は青綠色の顔料。
つゆくさの花は、其汁を取
りて顔料を製す可し。



不將脂粉調
粧新遠學青
山染色勻
金鳳釵頭替未
稱黛螺宜付
畫眉

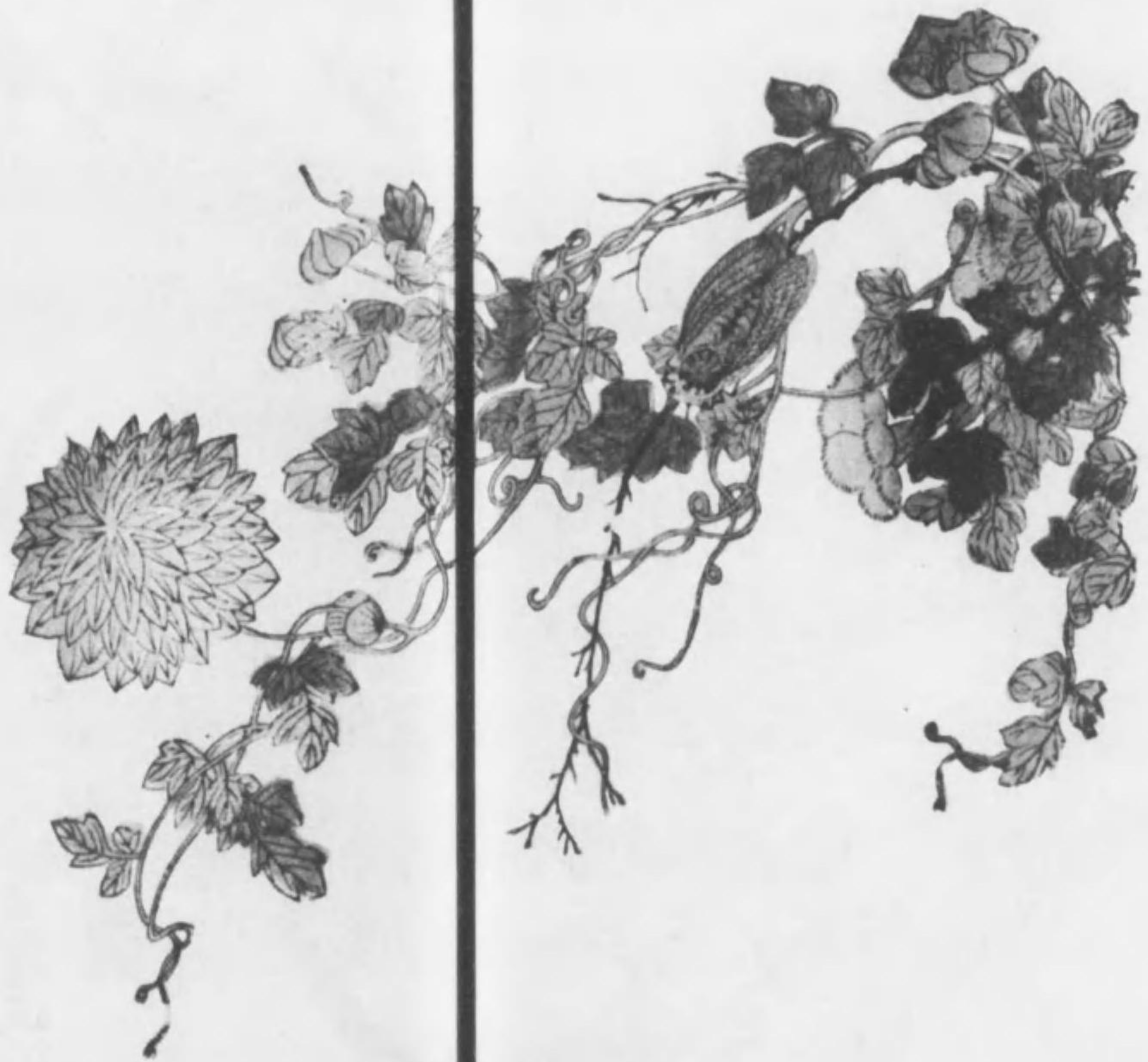


西番蓮(陳仲仁の畫に倣ふ。王司直の題)

名既呼蓮不在水。花雖似菊未因秋。

名は既に蓮と呼べども水に在らず、花は菊に似たりと雖も未だ秋に因らず。

解 西番蓮は、時計草のことなれども、こゝに畫かれたるは、ゆきおこしにして、右端に在る者は鐵線蓮なりといふ。おもしろからぬ題字なり。



名既呼蓮不在水
花雖似菊未因秋



蓮花(黄筌の畫に倣ふ。
張文潛の詩)

平池碧玉秋波瑩。綠雲擁
扇青搖柄。水宮仙子闌紅
粧。輕步凌波踏明鏡。

平池の碧玉秋波瑩く、綠雲、
扇を擁す青搖の柄。水宮の仙
子、紅粧を闌はし、輕歩凌波
踏明鏡を踏む。

解 第一句は池の水の平か
に靜なるをいふ。第二句は
蓮の葉に就いていふ。扇は
うちは。葉の形の圓きを形
容す。青搖は色青くして動
搖するなり。私に按ずるに
搖は瑤の誤ならんか。第三
四句は花に就いていふ。仙
子は仙女なり。即ち蓮花を
さす。凌波は美人の歩行の
輕逸なるを形容する語。明
鏡は池の水をいふ。



平池碧玉秋波
瑩綠雲擁扇
青搖柄水宮仙子
闌紅粧輕步凌波
踏明鏡



風蘭（吳秋林の畫に倣ふ）

楊誠齋の詩）

健碧續葉。斑文淺淺芳。

幽香空自秘。風豈秘幽香。

健碧續續たる葉、斑文淺淺たる芳、幽香空しく自ら秘す、風豈に幽香を秘せんや。

解 第一句は葉に就いて言ふ。健碧は勁健にして碧色なり。續續は入りみだれて多く盛なるさま。第二句は花に就いて言ふ。花に色淡き斑文あるなり。第三第四句は花の香に就いて言ふ。花、風に吹かれて幽香を發すと言ふなり。風蘭といふ名によつて此語を爲せるなり。

健碧續々葉斑文
淺々芳幽香空自
秘風豈秘幽香



蜀葵 (梅行思の畫に倣ふ。陳石亭の詩)

封條簇蒂密于葉。深紅淺絳鮮于霞。

封條簇蒂、葉よりも密に、深紅淺絳、霞よりも鮮かなり。蜀葵は、たちあふひ。又、からあふひとも云ふ。霞は、あさやけ、ゆふやけ。枝高く伸び花葉がり咲きて濃淡の色彩鮮麗なることを言ふなり。

封條簇蒂密于葉
深紅淺絳鮮于霞



紫雲英（一名荷花紫草、
吳梅溪の畫に倣ふ。曹
石庵の圖）

莫是雲英潛化。滿地碎瓊
狼籍。惹牧童驚問。蜀錦
甚時鋪得。

是れ雲英の潛に化せしなる莫
ふらんや。滿地碎瓊狼籍たり。
牧童の驚き問ふを惹く、蜀錦
甚の時にか鋪き得たると。

解 紫雲英は、れんげさう。
雲英は雲母の別名。碎瓊は
細小なる玉、紫雲英の花に
喩ふ。蜀錦は蜀江の錦、美
しき錦をいふ。紫雲英の花
は、細かき玉を地上一面に
取り散らしたるが如く、雲
英の變化して此花と爲りし
にあらざやと思はれ、又、
蜀江の錦を地上に鋪きたる
が如しとの意。吳梅溪は元
の人、花鳥雜畫に工なり。



莫是雲英潛化
滿地碎瓊狼籍
惹牧童驚問蜀
錦甚時鋪得



虞美人 (趙雪巖の畫に)

倣ふ。陳石亭の詩)

曉蒂垂青索 朝莖捧絳盤

曉蒂、青索を垂れ、朝莖、絳盤を捧ぐ。

解 虞美人は、ひなげし、虞美人草の蕾は青色の莖を垂れたるが如く、花は絳色の盤を捧げたるが如しとの意。

曉蒂垂青索
朝莖捧絳盤



水仙（王固の畫に倣ふ）

劉貞父の詩）

早於桃李晚於梅。冰雪肌膚姑射來。明月寒霜終夜靜。素娥青女共徘徊。

桃李よりも早く梅よりも遅く
氷雪の肌膚姑射より來る。明
月寒霜終夜靜に、素娥青女共
に徘徊す。

解 第一句は水仙の花の咲く季節をいふ。第二句は水仙の花の潔白なるを言ふ。莊子の逍遙遊蕩に、藐姑射の山に神人有りて居る。肌膚は氷雪の若く、淖約として處子の若し云云、とあるを引用せるなり。第三第四句は、寒月靜夜に於ける其風情を言ふ。素娥は花に喩へ、青女は葉に喩ふ。宋の劉攽は、字は貢父、公非と號す。臨江新喻の人。官、中書舍人に至る。著はす所、彭城集有り。

早於桃李晚於梅
冰雪肌膚姑射來
明月寒霜終夜靜
素娥青女共徘徊

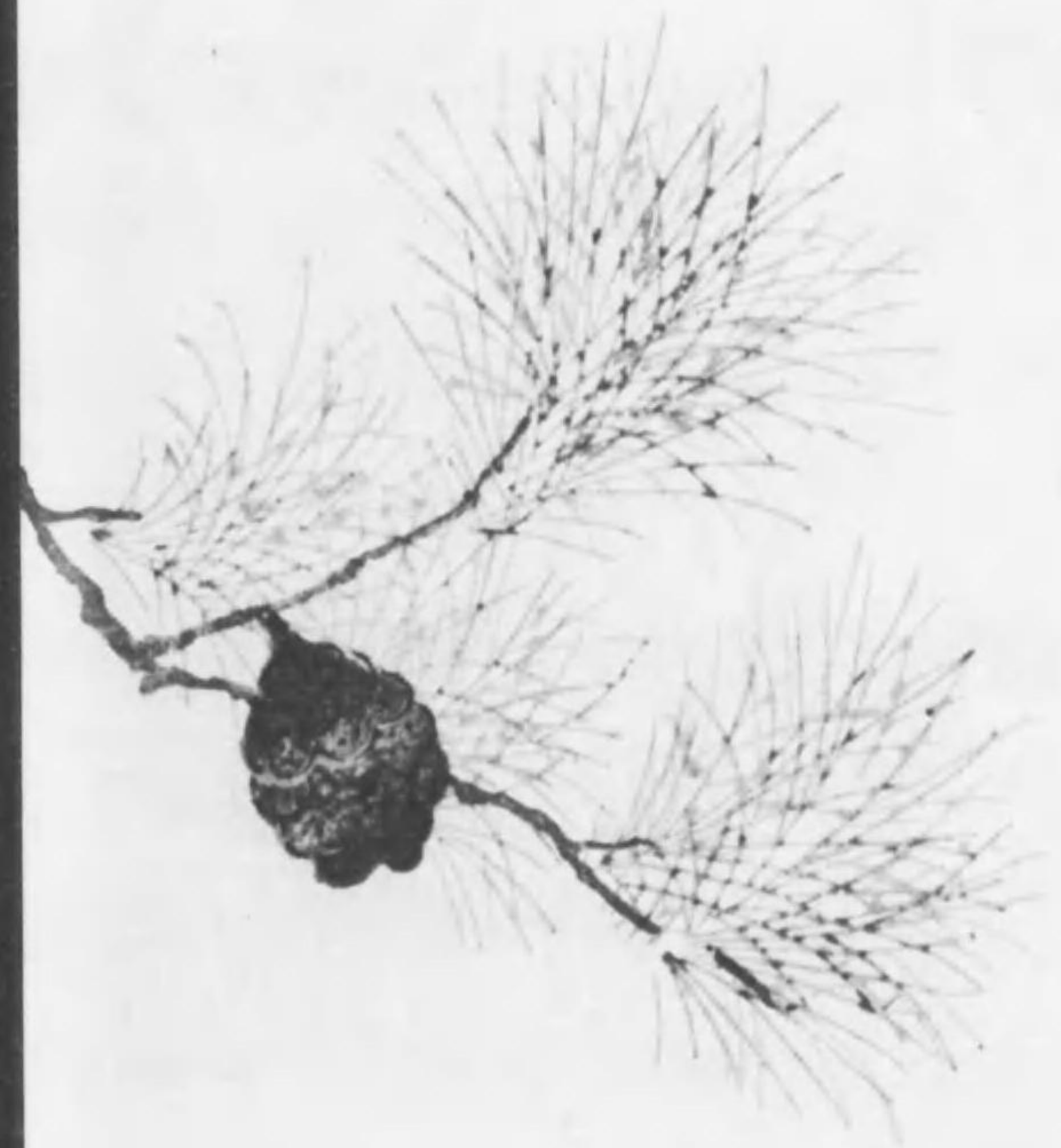


靈芝（買祥の畫に倣ふ。王安節の題）

蒼松作主人。紫芝稱上客。既拂徂徠雲。先共商山雪。蒼松、主人と作り、紫芝、上客と稱す。既に徂徠の雲を拂ひ、先づ商山の雪と共にす。解 靈芝は、紫芝ともいひ、單に芝ともいふ。和名、まんねんたけ、さいはひたけ等と稱す。古は芝を以て瑞草と爲す、故に靈芝と名づく。蒼松は老松なり。老松は主人にして、靈芝は上客なり。靈芝は古來高人隱士に珍重せらるゝの意。徂徠は今の山東省泰安縣に在る山の名。唐の天寶中、孔巢父、李白、韓準、裴政、張叔明、陶河の六人、徂徠山下の竹溪に隠れて社を結びて沈飲す、人、竹溪六逸と稱す。

商山は陝西省商嶺の東に在り。東園公、綺里季、夏黃公、何里先生、秦の亂を避けて此山に隱る、世の人、商山の四皓と稱す。紫芝歌を作る。其歌に曰く、莫莫高山、深谷逶迤。華華紫芝、可二以療二飢。唐虞世遠、吾將安歸。騶馬高蓋、其憂甚大。富貴之畏人兮、不若二貧賤之肆志と。宋の賈祥は、字は存中、内臣、官、通侍大夫。保康軍節度使觀察留後。知入内侍省事少卿に至り、忠良と誼す。竹石草木鳥獸樓觀を作り、皆工なり。人物龍水を善くす。

蒼余佐主
人紫芝稱
上客既拂
徂徠雲光
共商山雪



鳳頭萱 (黃居寀の畫に倣ふ。宋景文の句)

修莖無附葉 繁蕚攢廷首。每欲問詩人。定得忘憂否。

修莖、附葉無く、繁蕚、廷首に攢まる。毎に詩人に問はんと欲す、定めて憂を忘るるを得るや否やと。

解 鳳頭萱は、重葉萱草なり。鳳頭は八重の意。修莖は長き莖なり。修莖、附葉無しとは、莖長くして葉無きを言ふ。繁蕚は八重の花。廷首は莖のさき。繁蕚、廷首に攢まるとは、八重の花が莖のさきにむらがり咲けるを言ふ。第三四の句は、萱草はわすれぐさ、一に忘憂草といひ、詩傳に、萱草は以て憂を忘る可し、と曰へるを以て、此言を爲すなり。

修莖無附葉
繁蕚攢廷首
每欲問詩人
定得忘憂否



燕麥（景柳の畫に倣ふ）

王孫殿の題

詩人會咏齋斯羽。動股先傳七月篇。

詩人會て味ず齋斯の羽、股を動かすこと先づ傳ふ七月の篇解。燕麥は、和名からすむぎ、こゝに載せたる題實は、燕麥を詠じたるに非ず、其意にとまりたる齋斯を詠じたるなり。詩經周南齋斯篇に、齋斯羽、汎汎兮云とあり、幽風七月篇に、五月斯蠶動、股とあるに本づきて、此句を成したるなり。おもしろからぬ題字なり。

詩人會咏齋斯羽
動股先傳七月篇



魚兒牡丹（一名荷包牡丹，盛開の畫に倣ふ。周必大の句）

枝頭窈窕魚雙貫。花裏翩翩風對飛。

枝頭に窈窕として魚雙貫、花裏に翩翩として風對飛す。

解 魚兒牡丹は、けいざんぎく 翠盤草。たいりつさう、けまんぼたん、えうらくぼたん、きんちやくぼたん、ふぢぼたん等の別名あり。此詩句は魚兒牡丹の花の美しくしきさまを魚と風とに喩へしなり。魚雙貫とは、魚を買きたるが如く排列したる花二莖あるをいふ。魚兒牡丹の名に因りて此語を爲せるなり。翩翩は、ひらくと舞ふ貌。宋の周必大は、字は子充、一字は洪道、紹興二十年の進士、右丞相・左丞相・少保に累官し、益國公に封ぜられ、太師を贈られ、文忠と諡す。自ら平園老叟と號す。



枝頭窈窕魚雙貫
花裏翩翩風對飛
對飛



春蘭 (裴叔沐の畫に
倣ふ。楊炯の賦の句)

莖受露而將低。香從風而
自遠。

莖は露を受けて將に低からんとし、香は風に從つて自ら遠し。

解 この二句は、唐の楊炯の蘭の賦を抄録したるなり。楊炯は華陰の人、童子科に中り、校書郎を授けられ、後、盈川令と爲る。王勃、賈至、盧照鄰と與に初唐の四傑と爲す。文集有り世に行はる。宋の裴叔沐は字は德游、靜庵居士と號す。汴の人、後りて錢塘に居る。善く蘭竹枯木怪石を寫す。上に喜善堂の印在り。



莖受露而將
低香從風而
自遠

紫蝴蝶 (世奇の畫に倣ふ。黃庚山人の句)

金錢待網精仍住。紈扇輕掠凝不飛。

金錢、網を待ちて精仍住まじり、紈扇輕く掠かせども凝りて飛ばず。

解 紫蝴蝶は、いちはず。此詩句は此花の名が紫蝴蝶なるに因りて、蝶の故事を用ひたるなり。昔の蝶の精神今尚ほ住まりて此花と爲り、白きれりぎぬの團扇を輕く掠り動かせども飛び去らずと言ふなり。杜陽雜編に、唐の穆宗の時、殿前の牡丹盛に開く。黃白の蝶蝶萬數有り、飛んで花間に集まる。宮人圍うて羅巾を以て之を撲てども、獲る者有

る無し。上、網を張らしめ、遂に數百を得たり。暹明、之を視れば、皆、金玉なり。其狀工巧、比無し。内人爭うて、鮮纈を以て其脚を絆ぎ、以て首飾と爲す。夜は則ち光、帷窓の中より起る。其後、寶厨を開きて視れば、金錢玉屑の中に、蠟燭たる者有り、將に化して蝶と爲らんとする者有り。とあり。金錢、網を持つとは、此故事を用ひしなり。



金錢待網精仍住
紈扇掠凝不飛



藤菊(黃居實の畫に倣ふ。陳沂の句)

馬蘭花爲紫菊。旋覆花爲艾菊。皆菊之別種。東坡云。易姓寓非族。改顏隨所令。蓋謂此耶。

馬蘭花は紫菊と爲し、旋覆花は艾菊と爲す。昔、菊の別種なり。東坡云ふ、姓を易へて族に非ざるに寓し、顔を改めて令する所に隨ふと。蓋し此れを謂ふか。(旋覆は原本誤例。)

解 藤菊は、紅黃草、一名孔雀草、歐羅巴より渡來せるもの、西番菊と同じ。圖の左方に在るがそれなり。上方なるは紫菊なり。馬

蘭花は、よめた、紫菊と稱せらる。旋覆花は、をぐるま、艾菊と稱せらる。これ等は皆名は菊と稱せらるれども、純粹の菊に非ず。姓を易へて族に非ざるに寓し、顔を改めて令する所に隨ふは、蘇東坡が朱遜之に贈れる古詩の二句にして、本來は菊に非ざる花が、己の姓名を改めて、己の族に非ざる者即ち菊の間に寄寓し、菊花は黄色なるが正しき色なるに、本来の顔色を改めて、人の命令するまゝの色に咲き出づるやうになれりとの意なり。これもおもしろからぬ題字なり。



馬蘭花爲紫菊旋覆花爲艾菊
皆菊之別種東坡云易姓寓非
族改顏隨所令蓋謂此耶



錦葵(何尊師の畫に倣ふ)

曹建東の句)

花繡織文紫白交。葵名喜見蜀中錦。

花繡の織文紫白交はる。葵は名づく喜見蜀中錦。

解 錦葵は、ぜにあふひ。

錦葵の花の色彩の紫色白色相交はり、蜀江の錦の如く美しくしきことを言ふなり。

何尊師は、其姓氏を匿す。

宋の江南の人。龍徳中に在りて、衡岳に居り、蒼梧五嶺に往來す。宋に入りて僅に百年、人、其氏族年壽を問へば、但だ何何と云ひ、其郷里を問へば、亦、何何と云ふ。人因つて號して何尊師と謂ふ。花石に工に、猫の種種の變態を畫き、時の需する所と爲る。

解 錦葵は、ぜにあふひ。錦葵の花の色彩の紫色白色相交はり、蜀江の錦の如く美しくしきことを言ふなり。何尊師は、其姓氏を匿す。宋の江南の人。龍徳中に在りて、衡岳に居り、蒼梧五嶺に往來す。宋に入りて僅に百年、人、其氏族年壽を問へば、但だ何何と云ひ、其郷里を問へば、亦、何何と云ふ。人因つて號して何尊師と謂ふ。花石に工に、猫の種種の變態を畫き、時の需する所と爲る。



花繡織文紫白交
葵名喜見蜀中錦



美人蕉（黃居采の畫に倣ふ。路德延の句）

葉如斜界紙。心似倒抽書。

葉は斜界の紙の如く、心は倒抽の書に似たり。

解 美人蕉は、ひめばせう。葉は斜に界を引きたる紙の如く、心は倒に抽き出したる書の如し。おもしろからぬ題字なり。



葉如斜
界紙心
似倒抽
書

春深看覺霞成錦。夜永聞
疑玉有香。



春羅夜合（刀光嵐の畫
に倣ふ。王安節の題）

春深く見て覺ゆ霞、錦を成
すを、夜永く聞いて疑ふ玉、
香有るか。と。（原本、夜の
字を脱す。）

解 春羅は剪春羅、がんび
せんろう。夜合は百合の一
種。第一句は春羅の花の美
くしきを言ひ、第二句は夜
合の花の淨潔にして香ある
を言ふ。



秋海棠(趙孟頫の畫に倣ふ。陳石亭の句)
 濃顏常帶泪 嬌睡尚疑春。
のうげん せみだ けろす
 濃顏常に泪を帯び、嬌睡尚ほ春かと疑ふ。
 解 此は秋海棠の風情を巧に言ひあらはせるものにして、蓋し佳句なり。

濃顏常帶
 泪嬌睡尚
 疑春
 陳石亭



水仙茶梅（黃居寶の畫に倣ふ。王又唐の題）

寶珠助豔、寒玉分香。

寶珠、豔を助け、寒玉、香を分つ。

解 これ水仙、さざんくわ、梅を畫きたるにして、寶珠、豔を助くは、さざんくわに就いて言ひ、寒玉、香を分つは、主として水仙に就いて言ふ。南畫の贊の常套手段にして、感心し難し。



寶珠助豔
寒玉分香



玉簪(胡權の畫に倣ふ)

陳石亭の句)

似玉生無玷。爲簪琢不成。
玉に似て生じて玷無く、簪と爲すも琢し成らず。

解 玉簪は、ぎぼうし。此詩句は、玉簪といふ名に因りて此語を成せるなり。五代の胡權は、高情逸興、之を筆に寄せ、草木花鳥に工なり。博學にして詩を能くし、氣韻超邁、飄然として方外の志有り、三峽に猿を聞く賦あり、人口に膾炙す。

似玉生無玷
爲簪琢不成



剪秋羅(徐榮之の畫に倣ふ。黃庚の句)

誰か風刀紅破碎。細分蟬翼參差。

誰か風刀を下して紅破碎し、細に蟬翼を分ちて持參差たる解 剪秋羅は仙翁。此詩句は仙翁花の紅く薄く精緻にして美麗なることを詠じたるなり。風刀は刀の環に鈴あるもの、蟬刀といふと同じ。蟬翼は、せみのつばさ、薄きに喩ふ。參差は或は高く或は低く、不揃なるさま。



誰下風刀紅破碎細分
蟬翼參差

仙翁

紅黃秋菊 (滕昌祐の畫に倣ふ。白居易の詩)

秋暖寒氣遲、孟冬菊初拆。

黃紅間繁綠、爛若金照碧。

秋暖かにして寒氣遅く、孟冬菊初めて拆く。黄紅、繁綠に間はり、爛として金の碧を照らす若し。

解 紅黃秋菊は、秋の菊の紅きものと黄なるもの。孟冬は冬の初。拆は開くなり。黄紅は菊の花の色をいふ。繁綠は、しげりたる綠、葉をいふ。白居易は白樂天。

秋暖寒氣遲孟冬菊
初拆黃紅間繁綠爛
若金照碧



芙蓉(周浚の畫に倣ふ。
楊誠齋の句)

錦江秋色渾無賴。采樹春
風太不如。

錦江の秋色渾て無賴、采樹春
風太だ如かず。

解 錦江は蜀に在る川の名
采樹は花咲く樹。錦江のあ
たりの秋の景色には樂しむ
べき者無し、唯だ此花ある
のみ。此花の幽艶なるには
春風に咲く花も遠く及ばず
との意。



錦江秋色渾無賴采樹
春風太不如



雪裏紅 (林伯英の畫に倣ふ。成公綏の蝶蜂の賦の句、郭景五の題)

我異鷹峙。延頸鶴望。推翳徐廻。舉斧高抗。

解 雪裏紅は、ひよどりじやうご。こゝに畫かれたる葦草なり。此題實は雪裏紅を詠じたるに非ず。それに點綴されたる蝶蜂を詠じたるなり。鷹峙は、蝶蜂の立ちたるさまのいかめしきを言ふ。鶴望は頸をのばしてじつと物を見つむるさまを言ふ。翳を推すとば、蝶蜂



が草木の葉の茂りたるところをに身を隠したるをいふ。翳は足をつまだつるなり。成公綏は、字は子安、晉の東郡白馬の人、詩賦雜筆十餘卷あり。晉書卷九十二文苑傳に傳あり。



301
40

全繪本園子

第十一冊 草花繪本(下)

昭和十年八月十五日印
昭和十年八月二十日發

印刷 豫約會費
行 壹圓參拾錢

編者 小杉 放庵

編者 公田 連太郎

發行人 北原 義雄

東京市豊島區高田南町一丁目一九五

印刷所 美術印刷株式會社

東京市牛込區西五軒町三四

製本所 福山印刷製本所

東京市牛込區西五軒町三四

發賣所 福山書店

電話牛込四三六〇

東京市牛込區喜久井町三四

發行所

アトリエ社

電話牛込六四二一番
振替東京六六〇〇二番

301

40

終